

韓国尚州方言のアクセント

金 庸 珏

1. 尚州方言とは慶尚北道尚州郡のなかでつかわれていることばのことで、慶尚道方言群の下位方言に属する。尚州は地理的に慶尚北道の北西に位置し、忠清北道（忠清道方言群）と道境をなしており、また歴史的には新羅の北部地域にあたるため、言語地理学的にも重要な意味をもつところといえる。

さて、本稿でとりあげる資料は尚州出身である筆者の内省にもとづき、1990年8月、現地で確認調査した結果によるものである。ちなみに調査地点は筆者のうまれた尚州郡恭儉面支坪里で、話者は金章範（男、52歳）、黄貞玉（女、51歳）の二名である。

2. 韓国語における方言のアクセント・声調体系に対するこれまでの研究は、その対象としている方言が、大体ある方言群（主として慶尚道方言群）のなかの一部の下位方言にかざられているため、異説というのがそれぞれの方言差によるものである可能性もないわけではないが、いまのところ、それは方言差というよりは、とらえ方の相違としてうけとられる。たとえば、一音節名詞と二音節名詞に対して、〈表1〉のような異説がだされている。

〈表1〉

	許雄(1954)	鄭然榮(1966)	金永萬(1966)	梅田(1961)	服部 (1968)
mal [˦] (馬)	高 調	高 型	昇降調	下降型	有核accent(1)
mal [˥] (升)	中 調	低 調	平坦調	平板型	無核accent(0)
mal [˥] (語)	低 調	複合低高調	長音調	平板型	無核accent(0)
ha [˦] nəl(空)	高中調	高低型	昇降調	下降調	有核accent(1)
pa [˦] ram [˦] (風)	中高調	低低型	昇降調	平板型	有核accent(2)
kurəm [˥] (雲)	高高型	低低型	平坦調	平板型	無核accent(0)
saram [˥] (人)	低中調	複合低高調	長音調	平板型	無核accent(0)

(アクセント表記は筆者による)

このうち、梅田と服部は／mal／（語）と／saram／（人）に対して、これを／maal／saaram／というふうに解釈し、それぞれ二音節名詞、三音節名詞と対立させている。

しかし、尚州方言において、さらにはアクセント体系がたもたれている韓国の諸方言において、なが母音が実現するのは「低調」「複合低高調」といった、ひくいピッチを特徴とするアクセント構造においてのみであり、このばあい、なが母音のもつ弁別的機能はアクセント構造のなかに帰属するものと考えられるので、みじか母音となが母音の音韻的対立はみとめられない。ただし、韓国のなかでもソウルを中心とする、アクセント体系がくずれている方言においては、／mal／（馬・升）と／ma:l／（語）とのあいだに、みじか母音となが母音の対立がみとめられる。

上村（1989）によれば、「単語アクセントは聴覚的には単語を構成する音節内、もしくは音節相互間の音声のたかさ、あるいは音声のつよさ、またしばしば音声の持続、さらには音色の変化をもととなった音声的な型として一般に実現され、音声のたかさが支配的であるにせよ、音声のつよさが支配的であるにせよ、その両者が随伴関係にあるような単語アクセントが存在するばあい、聴覚的なたかさ（pitch）をたかく、すなわち、音響的には基本周波数（fundamental frequency）をおおきくし、かつ聴覚的なきこえ（loudness）をおおきく、すなわち音響的には波形の振幅（intensity）をおおきくするための積極的な調音的な努力がなされる型のアクセントをacute accent、一方、聴覚的なたかさをひくくするために、呼吸筋もしくは声帯をはじめとする発声に関与する喉頭の諸筋肉をよりおおきく緊張させる型のアクセントをgrave accent」とよんでいる。このような観点から上村は、英語や日本語（標準語）をacute accentに、ロシア語や、日本のなかで九州の都城方言をgrave accentにいており、中国語のばあい、第一声（55）、第二声（35）、第四声（51）をacute accent、第三声（214）をgrave accentとしてみとめている。

中国語と同様、尚州方言のアクセント・音調体系のなかで、acute accentとgrave accentとは共存しているといえる。つまり、本稿ではこれまで低調、複合低高調、長音調などによばれてきた音調をgrave accent、その他のものをacute accentとしてみとめることにする。

3. 尚州方言のいちいちの単語のアクセント構造は、つぎの4つのケースのうちのいずれかとなる。

(1) のぼり音調

第一音節がひくく、第二音節からたかく発音されるものである。しかし、一度たかくなった声は単語の最後の音節のところではかならずさがる。よって、一音節単語には存在しないタイプである。二音節名詞のばあい、それに助詞などの文法的な接辞がつ

づくと、その接辞が一音節語であれば接辞のところが、また二音節以上であればその最後の音節が、ひくく発音される。そして、この類の三音節以上の名詞に文法的な接辞がつづくばあい、ひくいピッチをもっていた名詞の最後の音節はたかめられ、接辞の最後の音節だけがひくくなる。一方、この音調において音声のたかさとつよさとは随伴関係にあり、日本語の場合と同様、さがる直前の音節が特につよく発音される傾向がある。

以下、その語例をしめすが、表記は音韻記号による。また、○は単語の音節を、▽は助詞などの文法的な接辞の音節を意味する。たとえば、○○▽▽は二音節単語に二音節の接辞の音節がつづいたばあいである。

A. 二音節名詞 (○「○」, ○「○」▽, ○「○▽」▽…)

ta「ri」 (橋・脚)	na「mu」 (木)
cəŋ「ci」 (台所)	kam「ca」 (じゃが芋)
pa「ram」 (風)	i「sak」 (穂)
əl「kul」 (顔)	sap「c'ak」 (しおり)

B. 三音節名詞 (○「○○」○, ○「○○」▽, ○「○○▽」▽…)

k'e「ku」ri (蛙)	p'i「re」mi (追川)
kən「ti」ki (汁の実)	ok「su」k'u (とうもろこし)
k'o「raŋ」ci (尾)	in「cəl」mi (餅)
to「si」rak (弁当)	k'u「cuŋ」mul (汚水)

C. 四音節名詞 (○「○○」○, ○「○○○」▽, ○「○○○▽」▽…)

mi「k'ura」ci (どじょう)	toj「kəre」mi (円)
ko「səmtə」c'i (針鼠)	p'i「t'usəŋ」i (血みどろ)
mə「rik'a」rak (髪の毛)	sum「pak'ok」cil (隠れん坊)

(2) 急くだり音調

単語の最初の音節にたかいピッチがおかれるケースである。このばあい、最初の音節はそのあとにくる音節にくらべて相対的につよく発音される。この類に属する一音節名詞に文法的な接辞がつくと、その接辞のところがひくくなり、また単独でも下降調としてあらわれる。

A. 一音節名詞 (○「」, ○「」▽, ○「」▽▽…)

p'i「」 (稗)	c'a「」 (車)	mo「」 (苗)
u「」 (上)	cip「」 (家)	p'em「」 (指尺)
paŋ「」 (部屋)	k'ot「」 (花)	t'al「」 (毛)

B. 二音節名詞 (○¹ ○, ○¹ ○▽, ○¹ ○▽▽…)

mə ¹ ri (頭)	ko ¹ ke (首)
cəp ¹ si (皿)	maŋ ¹ c'i (槌)
pə ¹ sət (葺)	ha ¹ p'um (欠伸)
əŋ ¹ tal (陰地)	tal ¹ rjək (暦)

C. 三音節名詞 (○¹ ○○, ○¹ ○○▽, ○¹ ○○▽▽…)

mi ¹ nəri (嫁)	a ¹ cime (叔母)
k'al ¹ t'eki (漏斗)	nəl ¹ kəni (年寄)
cu ¹ kənk'e (雀斑)	ə ¹ kəmnɪ (奥歯)
ko ¹ tərəm (氷柱)	t'al ¹ k'ukcil (しゃっくり)

D. 四音節名詞 (○¹ ○○○, ○¹ ○○○▽, ○¹ ○○○▽▽…)

mi ¹ sutkaru (焦がし粉)	t'i ¹ əs'əki (別ち書き)
ka ¹ səmari (胸焼け)	ən ¹ heŋnamu (銀杏)

(3) おそくだり音調

単語の最初の音節から第二音節までがややたかく、そのあとは声をゆるめてひくく発音されるものである。「急くだり音調」とくらべた時、最初のはじまりが多少ひくく、したがって、音声のさがり目においても、「急くだり音調」が「高」から「低」へさがるとすれば、「おそくだり音調」は「中」から「低」へさがる。一方、この類の一音節名詞と二音節名詞のばあい、単独では平板調（中平）であられるが、これに助詞などの文法的な接辞がつづく、その接辞をふくめて第三番目の音節からひくくなる。

A. 一音節名詞 (○¹, ○▽¹, ○▽¹▽…)

i ¹ (齒)	ce ¹ (灰)	p'a ¹ (葱)
k'o ¹ (鼻)	t'ə ¹ (所)	cil ¹ (道)
t'ek ¹ (顎)	pal ¹ (足)	put ¹ (筆)

B. 二音節名詞 (○○¹, ○○¹▽, ○○¹▽▽…)

more ¹ (明後日)	sek'i ¹ (縄)
k'egɪ ¹ (鋤)	kaksi ¹ (新婦)
kurəm ¹ (雲)	k'ipig ¹ (仮病)
kəkɕəŋ ¹ (心配)	c'amk'ot ¹ (つつじ)

C. 三音節名詞 (○○¹ ○, ○○¹ ○▽, ○○¹ ○▽▽…)

nakə ¹ ne (旅人)	tok'e ¹ pi (お化け)
---------------------------	-----------------------------

mulko⁺ ki (魚)

coŋa⁺ ri (ふくら脛)

ip'in⁺ ne (婦人)

k'opa⁺ nəl (鉤針)

t'oŋco⁺ rim (缶詰)

momt'uŋ⁺ i (体)

D. 四音節名詞 (○○⁺○○, ○○⁺○○▽, ○○⁺○○▽▽…)

ora⁺ pəni (兄)

sia⁺ puci (舅)

hetpiŋ⁺ ari (新前)

(4) ひくめ音調

「おそくだり音調」と対立するもので、「おそくだり音調」における「中」のはじまりよりもっとひくめて発音しようとするために、ひくいピッチの終了後、ピッチのゆるやかな上昇とともに母音の持続の増大をとまなうケースである。これは上村 (1989) のいう典型的なgrave accentで、上村によれば、「grave accentがそのひくいピッチを特徴としながら、acute accentとともに単語アクセントでありうるのは、ピッチのひくい個所に主として喉頭で感じられる調音的な緊張のピークがあるからであって、それが声のひくさという聴覚的特徴とともに、はなし手に、そしてはなし手であるきき手に知覚されるから」である。

さて、尚州方言のばあい、ひくいピッチのおかれる個所は単語の最初の音節にかぎられている。ゆえに最初の音節をのぞいたアクセント構造は、「おそくだり音調」と大体類似している。しかも四音節以上の単語には語例がすくなく、次第に「おそくだり音調」へ統合されていく傾向がみられる。この現象は、このアクセント構造において呼吸筋など発声に関与する喉頭の諸筋肉をよりおおきく緊張させているためにおこる、発声における呼気の効率的な使用としてみとめられる。

A. 一音節名詞 (ㄱ○⁺, ㄱ○▽⁺, ㄱ○▽⁺▽…)

ㄱti⁺ (後)

ㄱse⁺ (鳥)

ㄱka⁺ (縁)

ㄱil⁺ (仕事)

ㄱpem⁺ (蛇)

ㄱcat⁺ (朝鮮松の実)

ㄱsok⁺ (中)

ㄱnun⁺ (雪)

ㄱməŋ⁺ (痣)

B. 二音節名詞 (ㄱ○○⁺, ㄱ○○⁺▽, ㄱ○○⁺▽▽…)

ㄱare⁺ (一昨日)

ㄱcepi⁺ (燕)

ㄱanke⁺ (霧)

ㄱnəkte⁺ (狼)

ㄱsaram⁺ (人)

ㄱkəcit⁺ (嘘)

ㄱtincəŋ⁺ (味噌)

ㄱsoŋkot⁺ (錐)

C. 三音節名詞 (ㄱ○○⁺○, ㄱ○○⁺○▽, ㄱ○○⁺○▽▽…)

ㄱkuti⁺ ki (蛆)

ㄱsat'u⁺ ri (訛)

┘nəlt'i[↑]ki (板跳び)

┘tit'og[↑]su (後頭)

┘haso[↑]jən (哀訴)

┘noc'og[↑]kak (未婚の男性)

┘cəŋtan[↑]ci (脹ら脛)

┘soknun[↑]s'əp (睫)

D. 四音節名詞 (┘○○[↑]○○, ┘○○[↑]○○▽, ┘○○[↑]○○▽▽…)

┘kunko[↑]kuma (焼芋)

┘pint'al[↑]t'əri (一文なし)

┘kolmok[↑]tecəŋ (餓鬼大将)

以上のことから、尚州方言のアクセント体系を表でまとめると、〈表2〉のようになる。ここでは四音節単語までをあらわしているのだが、これより音節数がふえても、この4つの枠からはずれることはない。ただ、音節の数がおおくなればなるほど、「のぼり音調」のしめる割合がたかくなる傾向がみられる。

〈表2〉

	一音節語	二音節語	三音節語	四音節語
のぼり音調		○┘○ [↑]	○┘○ [↑] ○	○┘○○ [↑] ○
急くだり音調	○ [↑]	○ [↑] ○	○ [↑] ○○	○ [↑] ○○○
おそくだり音調	○ [↑]	○○ [↑]	○○ [↑] ○	○○ [↑] ○○
ひくめ音調	┘○ [↑]	┘○○ [↑]	┘○○ [↑] ○	┘○○ [↑] ○○

4. 一方、中期韓国語と尚州方言との間には〈表3〉のような対応関係がみいだされる。ちなみに()でしめたのは、用例がきわめてすくないもの、もしくは一例もみられないものである。中期韓国語で声調をしめしていた平声・去声・上声の3つのくみあわせからすれば、二音節単語に9、三音節単語に27の型が予想されるが、実際数は予想をおおきくしたまわっている。その理由の1つとして、上声がいくつかの二音節語をのぞけば、主として語頭にしかあらわれないことがあげられる。

〈表3〉

中 期 韓 国 語				尚 州 方 言
	平平	平平平 平平去	…	のぼり音調
平	平去 (平上)	平去平 平去去	…	急くだり音調
去	去平 去去 (去上)	去平去 (去平平) (去去平) (去去去)	…	おそくだり音調
上	上平 上去 (上上)	上平去 上去去 (上平平) (上去平)	…	ひくめ音調

この表からわかるように、中期韓国語と尚州方言との間には「のぼり音調」をのぞき、第一音節のピッチによって、それが平声ではじまる単語は「急くだり音調」に、去声ではじまる単語は「おそくだり音調」に、上声ではじまる単語は「ひくめ音調」に、それぞれ規則的に対応している。そして、尚州方言で「のぼり音調」が実現するのは、中期韓国語で平声が2つ以上つづけられた場合にかぎる。

ところで、このような中期語との対応関係は尚州方言における複合語のもつアクセント構造とも一致している。たとえば、一音節単語どうしによる二音節の複合語は次のようなアクセント構造をもつ。

- A. $\bigcirc^{\uparrow} + \bigcirc^{\uparrow} \rightarrow \bigcirc^{\uparrow} \bigcirc^{\uparrow}$
sul[↑] cip[↑] (酒屋), k'ot[↑] pat[↑] (花壇)
- B. $\bigcirc^{\uparrow} + \bigcirc^{\downarrow} \rightarrow \bigcirc^{\uparrow} \bigcirc$
sut[↑] pul (炭火), sul[↑] kap (酒代)
- C. $\bigcirc^{\uparrow} + \text{L}\bigcirc^{\downarrow} \rightarrow \bigcirc^{\uparrow} \bigcirc$
cip[↑] se (家賃), ap[↑] ti (前後)
- D. $\bigcirc^{\downarrow} + \bigcirc^{\uparrow} \rightarrow \bigcirc \bigcirc^{\downarrow}$
talpit[↓] (月光), anpaŋ[↓] (奥の間)
- E. $\bigcirc^{\downarrow} + \bigcirc^{\downarrow} \rightarrow \bigcirc \bigcirc^{\downarrow}$
pompi[↓] (春雨), k'otmul[↓] (鼻水)
- F. $\bigcirc^{\downarrow} + \text{L}\bigcirc^{\downarrow} \rightarrow \bigcirc \bigcirc^{\downarrow}$
pet'al[↓] (食あたり), k'ipig[↓] (仮病)
- G. $\text{L}\bigcirc^{\downarrow} + \bigcirc^{\uparrow} \rightarrow \text{L}\bigcirc \bigcirc^{\downarrow}$
_Lpəlcip[↓] (蜂の巣), _Ltitsan[↓] (後の山)
- H. $\text{L}\bigcirc^{\downarrow} + \bigcirc^{\downarrow} \rightarrow \text{L}\bigcirc \bigcirc^{\downarrow}$
_Lsəlnal[↓] (元日), _Lsokot[↓] (下着)
- I. $\text{L}\bigcirc^{\downarrow} + \text{L}\bigcirc^{\downarrow} \rightarrow \text{L}\bigcirc \bigcirc^{\downarrow}$
_Lk'ulpəl[↓] (蜜蜂), _Lnetka[↓] (川端)

ご覧のように、Aの「急くだり音調」+「急くだり音調」において「のぼり音調」が実現するほかは、第一音節目にくる単語のもとの音調どおり、複合語の音調は実現されるのである。

そして、一音節語と二音節語とによる三音節の複合語の場合、次のようなアクセント構造をもつ。

- A. $\bigcirc^{\uparrow} + \bigcirc^{\uparrow} \bigcirc^{\uparrow} \rightarrow \bigcirc^{\uparrow} \bigcirc^{\uparrow} \bigcirc$

- pe[┐] na[┐] mu (梨の木), k'ot[┐] ta[┐] pal (花束)
- B. ○[┐] + ○[┐] ○ → ○[┐] ○[┐] ○
tak[┐] ko[┐] ki (鶏肉), p'al[┐] s'i[┐] rəm (腕相撲)
- C. ○[┐] + ○○[┐] → ○[┐] ○○
cət[┐] kaci (小枝), c'a[┐] kəkəcəŋ (車の心配)
- D. ○[┐] + ㇿ○○[┐] → ○[┐] ○○
sul[┐] tampe (酒とタバコ), t'oŋ[┐] p'ari (糞蠅)
- D'. ○[┐] + ㇿ○○[┐] → ○[┐] ○[┐] ○
cip[┐] sa[┐] ram (家内), ap[┐] to[┐] raŋ (前の溝)
- E. ○[┐] + ○[┐] ○ → ○○[┐] ○
t'oŋna[┐] mu (丸木), pompa[┐] ram (春風)
- E'. ○[┐] + ○[┐] ○ → ○[┐] ○[┐] ○
pit[┐] ca[┐] ru (箒), son[┐] me[┐] ti (指の節)
- F. ○[┐] + ○[┐] ○ → ○○[┐] ○
hekə[┐] ri (隔年), mulko[┐] ki (魚)
- F'. ○[┐] + ○[┐] ○ → ○[┐] ○[┐] ○
son[┐] pa[┐] tak (掌), ki[┐] kə[┐] ri (耳輪)
- G. ○[┐] + ○○[┐] → ○○[┐] ○
p'inun[┐] mul (血涙), mompu[┐] rim (身悶え)
- H. ○[┐] + ㇿ○○[┐] → ○○[┐] ○
sonsu[┐] kən (ハンカチ), kəlcit[┐] ki (作文)
- I. ㇿ○[┐] + ○[┐] ○ → ㇿ○○[┐] ○
ㇿsokc'i[┐] ma (下に着るチマ), ㇿtitku[┐] jəŋ (後穴)
- I'. ㇿ○[┐] + ○[┐] ○ → ○[┐] ○[┐] ○
kam[┐] na[┐] mu (柿の木), tol[┐] ta[┐] ri (石橋)
- J. ㇿ○[┐] + ○[┐] ○ → ㇿ○○[┐] ○
ㇿilca[┐] ri (職場), ㇿnəlt'i[┐] ki (板跳び)
- K. ㇿ○[┐] + ○○[┐] → ㇿ○○[┐] ○
ㇿkimme[┐] ki (除草), ㇿtitson[┐] cil (後片付け)
- L. ㇿ○[┐] + ㇿ○○[┐] → ㇿ○○[┐] ○
ㇿnunsa[┐] ram (雪達磨), ㇿmalte[┐] k'u (口答え)

このうち、第一音節目にくる単語のもとの音調が、複合語においてもそのままも

たれていないのは、A、B、D'、E'、F'、I'のみであり、これらはいずれも「のほり音調」としてあらわれている。この事実を逆にいえば、一音節単語には存在しない「のほり音調」が実現するためにはこれらの条件が必要であることを意味する。なかでもBは、二音節複合語におけるAのケースと関連するもので、両方とも「急くだり音調」が接続する特徴をもっている。

一方、二音節語と一音節語とによる三音節複合語の場合は、次のように二音節語のもとの音調がそのままたれる。

A. $\bigcirc \text{「}\bigcirc\text{」} + \bigcirc \text{「}\bigcirc\text{」} \rightarrow \bigcirc \text{「}\bigcirc\text{」} \bigcirc$
 na[「]mut[」] nip (木の葉), ta[「]rak[」] pag (屋根裏部屋)

B. $\bigcirc \text{「}\bigcirc\text{」} + \bigcirc \text{「}\bigcirc\text{」} \rightarrow \bigcirc \text{「}\bigcirc\text{」} \bigcirc$
 cu[「]mæk[」] pap (お握り), əl[「]kul[」] pit (顔色)

C. $\bigcirc \text{「}\bigcirc\text{」} + \text{「}\bigcirc\text{」} \rightarrow \bigcirc \text{「}\bigcirc\text{」} \bigcirc$
 sa[「]njaŋ[」] ke (獵犬), a[「]c'im[」] il (朝の仕事)

D. $\bigcirc \text{「}\bigcirc\text{」} + \bigcirc \text{「}\bigcirc\text{」} \rightarrow \bigcirc \text{「}\bigcirc\text{」} \bigcirc \bigcirc$
 c'o[「]kacip (草屋), mi[「]jəkkuk (若布の汁)

E. $\bigcirc \text{「}\bigcirc\text{」} + \bigcirc \text{「}\bigcirc\text{」} \rightarrow \bigcirc \text{「}\bigcirc\text{」} \bigcirc \bigcirc$
 pa[「]tatmul (海水), po[「]romtal (満月)

F. $\bigcirc \text{「}\bigcirc\text{」} + \text{「}\bigcirc\text{」} \rightarrow \bigcirc \text{「}\bigcirc\text{」} \bigcirc \bigcirc$
 pa[「]tatka (海辺), to[「]mapem (とかげ)

G. $\bigcirc \text{「}\bigcirc\text{」} + \bigcirc \text{「}\bigcirc\text{」} \rightarrow \bigcirc \text{「}\bigcirc\text{」} \bigcirc \bigcirc$
 kaks[「]i[」] pag (嫁の部屋), k'oma[「]cip (子供の家)

H. $\bigcirc \text{「}\bigcirc\text{」} + \bigcirc \text{「}\bigcirc\text{」} \rightarrow \bigcirc \text{「}\bigcirc\text{」} \bigcirc \bigcirc$
 orən[「]son (右手), sek'i[「]cul (縄)

I. $\bigcirc \text{「}\bigcirc\text{」} + \text{「}\bigcirc\text{」} \rightarrow \bigcirc \text{「}\bigcirc\text{」} \bigcirc \bigcirc$
 k'oma[「]mal (子供の言葉), kurəm[「]sok (雲の中)

J. $\text{「}\bigcirc \text{「}\bigcirc\text{」} + \bigcirc \text{「}\bigcirc\text{」} \rightarrow \text{「}\bigcirc \text{「}\bigcirc\text{」} \bigcirc$
 ˌsemo[「]k'ol (三角形), ˌcicip[「]a (女の子)

K. $\text{「}\bigcirc \text{「}\bigcirc\text{」} + \bigcirc \text{「}\bigcirc\text{」} \rightarrow \text{「}\bigcirc \text{「}\bigcirc\text{」} \bigcirc$
 ˌcaŋsa[「]k'un (商人), ˌsoŋkot[「]ni (犬歯)

L. $\text{「}\bigcirc \text{「}\bigcirc\text{」} + \text{「}\bigcirc\text{」} \rightarrow \text{「}\bigcirc \text{「}\bigcirc\text{」} \bigcirc$
 ˌkəcit[「]mal (嘘), ˌsinet[「]ka (小川の辺)

以上のことから、中期韓国語と尚州方言との間には、平声→急くだり音調、去声→

おそくだり音調、上声→ひくめ音調、のような対応関係が成立することがわかる。しかし、このような対応関係がみられるからといって、尚州方言が中期韓国語のアクセント体系をそのままもっているとはかぎらない。というのは、『訓民正音解例本』（1446）によれば、平声は低調（安而和）、去声は高調（舉而壯）、上声は先低後高調（和而壯）であって、平声と去声は尚州方言において逆転した形であらわれているのである。

5. 以上のべてきたものを結論としてまとめると、次のようである。

第一、尚州方言において、単語のアクセント構造は第二音節までの音調によって決定される。

第二、尚州方言の単語のアクセント構造には、①のぼり音調、②急くだり音調、③おそくだり音調、④ひくめ音調、の4つのタイプが存在する。このうち、ひくめ音調は grave accent に属し、その他のものは、acute accent である。つまり、尚州方言のアクセント体系において、acute accent と grave accent とは共存しているのである。

第三、中期韓国語と尚州方言との間には、平声→急くだり音調、去声→おそくだり音調、上声→ひくめ音調、のような対応関係がみいだされる。そして、尚州方言ののぼり音調は中期語において平声が2つ以上つづけられた単語に対応しており、しかもこれは複合語において急くだり音調の単語が接続した場合とも一致する。

参考文献

1. 鄭然榮（1974）『慶尚道方言聲調研究』（塔出版社）
2. 金次均（1980）『慶尚道方言의聲調体系』（科学社）
3. 中本正智（1990）『日本列島言語史の研究』（大修館書店）
4. 許雄（1954）「慶尚道方言의聲調」（『崔鉉培先生還甲記念論文集』所収）
5. 金永萬（1974）「國語韻律의本質과變遷」『國語國文學』第65・66合併号）
6. 梅田博之（1961）「慶尚北道漆谷方言（朝鮮語）のアクセント」（名古屋大学文学部研究論文集25）
7. 服部四郎（1968）「朝鮮語のアクセント・モーラ・音節」（『ことばの宇宙』第3巻第5号）
8. 上村幸雄（1989）「acute accent と grave accent」（『日本語音声』研究報告1）
9. 関光準（1990）「日本語と朝鮮語のアクセントとイントネーション」（『講座日本語と日本語教育』第3巻、明治書院）

〈付記〉

本稿は、1990年11月17日、第211回都立大学方言学会で発表したものをもとに加筆、訂正したものである。

(Kim Yong Gak・東京都立大学大学院学生)